

こころ日記

「ぼちぼち」

(7)からだの話

脇野 千恵

私は長い間、性教育の授業実践と研究に取り組んでいます。自分自身の育ちの中で、大人になることへの葛藤に苦しんだこと、蛹期と言われる思春期にある子どもたちへのサポートができればといったことがきっかけです。

今、小学校では保健の教科書があり、二次性徴などの色々な体の学習をすることになっています。中学校でも、保健体育という教科で、二次性徴と性感染症のことを学習することになっています。教科は保健体育です。

子どもたちが自分のからだのしくみを科学的に学ぶ機会は、保健の授業でしかありません。しかし、実状は、他のことは頑張るけれど“性”についてはどうも……。そのことについては教えたくない。

今日は雨だから仕方がないか…といった体育教師が相変わらずいることです。

体育系の大学の教員免許過程で、保健科目の講義を、大学の先生たちはどちらかという持ちたがらないといった話を聞いたことがあります。また今の教育大学でさえ、性教育について教えることはありません。医療系の学校もそうだろうと思います。

毎年新採の教員が赴任してきますが、私は必ず性教育について講義しています。ほとんどの若い教師たちは、性教育をきちんと教えてもらった記憶がないと言います。しかし、中学校にいながら、思春期にある子どもたちの心とからだの変化について、何も知らないではすまされません。

彼らは講義の後、異口同音にして

「自分のからだなのに本当に知らないことばかりだった。もっと早くに知っていたら…」

と感想を述べてくれます。そして、性教育といえ、生命誕生、二次性徴というイメージがあり、特に命の成り立ちの性交については、最も語りにくいテーマであるとも。思春期の子どもたちは多感です。年の近い分、興味本位に先生のプライベートに踏み込む生徒もいるからです。

私たちが扱う性教育の分野は実に多岐なテーマにわたっています。科学的な知識をベースにして、ジェンダーや、関係性のテーマの中として恋愛学習や性被害、性暴力、デートDV、性情報もあります。進んだ中学校では、こういった学習を人権学習の中で取り入れるようになってきています。また、「男女なかよく」といったテーマの中に、今は同性愛についても触れています。

社会の変化とともに、“性”をめぐる問題も変化してきています。そして、スマートフォンを持つ中学生の周りには、“性”をめぐる危ない話がたくさんあることにも気づかされます。

※S子の場合

S子は、とても物静かな性格で、どちらかというと寡黙な性格でした。1年生では、目立たない普通の生徒でした。家族は、母親と兄、姉の4人。母子家庭とはいえ、母親は看護師として頑張っていていたので、そこそこの生活ぶりでした。

2年生では少し積極的な面を出すことができ、学級委員になり、自主研修である校外学習の計画を立てるといったこともできるほどになっていました。

3年生、他の生徒と同じように彼女もまがいなく思春期がやってきていました。スカートを短くしたり、瞼を二重にするアイプチやピアス、髪の毛の色も少しずつ茶色に染まっていったりと変化がみられました。大人に対しても反抗的な態度を示すようになっていきました。日々子どもたちを観察していると、その変化のスピードがなんと速いことか。

S子にそんな変化が見られるようになった要因の一つは、彼氏ができたことでした。同級生のM太。クラスは違いましたが、休み時間には必ずS子の教室にやってきては、周りの目もはばからず膝の上に座り抱き合っています。朝早く、たまたまその様子を見た教師から、こっぴどく叱られたこともありましたが。級友たちは、さすがに彼らの態度に嫌気がさし、S子は周りから冷めた目で見られるようになりました。

人を好きになることは悪いことではありません。しかし、学校では恋愛はまだまだ「不純異性交遊」という認識です。まして人前でいちゃいちゃなんて…。色々な教師から、服装のことなどちくちく注意を受けることに、だんだんと“大人は信頼できない！”と心を閉ざしていくようになりました。

やがて遅刻も増え、休むことも。家でも母親とうまくいかず、プチ家出をする

こともあったようです。学校の様子を伝えると、母親は追い詰められたという思いからか、

「あの子のことは、もうそっとしておいてほしい。」

という答えしか返ってきませんでした。

家や学校での居場所がなくなっていった彼女は、彼と過ごす時間が唯一の癒しとなりました。からだの関係ができるとなおさらでした。

一方M太は、とても明るく冗談が好きな子でした。小顔で長身な容姿は、とてもかっこいい少年でしたが、精神的な面ではとても幼稚で、小さなトラブルを頻繁に起こしていました。S子に近い生徒は、

「何であんな子と付き合うの？」
とつぶやく子もいるくらいでした。

学校生活の中での、男女のカップルは数%です。今どきの子の「つきあう」とは、まずはメルアド交換。そこから発展するカップルは本当に少なく、せいぜいメールのやりとりか、一緒に帰るにとどまっています。中学生でセックスにいたるカップルは、世間で言われるほど決して多くはありません。むしろ高校生にその割合は急に増える傾向にあります。

教師たちは、S子とM太の付き合い方にとっても危惧していました。まずは、妊娠です。生活習慣もきちんと身についていない彼らに、避妊ができるのかといったことです。

夏休みが終わり2学期が始まったころ、S子は授業に入れず、保健室に通うようになりました。何かを訴えたい様子を察した養護担当と私は、思い切ってM太との関係について聞いてみました。

実は、S子はM太から性暴力を受けていたのです。暴力は親密な関係で起こりやすく、見えにくいものです。S子は自分のことを好きと言ってくれるM太のことなら何でもしたそうです。からだの関係も嫌な時もあったそうですが、断ると殴られ、

「避妊をして！」
と懇願してもお金がないと言って、してくれなかったそうです。そうこうしているうちに、S子は自分のからだの変調に気づき始め、もしやと思い、妊娠検査を試みると陽性に。そのことが信じられずに3回も検査をしたということです。

どうすればいいのかわからず、自分のお腹を強くたたいたりもしました。病院には行くには、高い費用がかかります。とにかくS子なりに色々とし恵を絞った末に、ネット上で中絶できる薬が買えることを知りました。すぐに買い求めたといいます。その薬は海外で売っているもので、日本では認可していない違法な薬（劇薬）でした。とにかくその薬を飲み、自宅で中絶をしたと号泣して打ち明けたのです。

このようなことは、めったにあることではありません。S子がたった一人で、妊娠に向き合い処理をしたことに、何の力にもなってやれなかったことに落ち込

みました。このことについての情報は最小限に止めなければなりません。私たちは、嫌がるS子を説得し、親へ連絡、病院への受診を進めました。何とか解決の方向にもっていくことができました、無事に入試を終え、高校へと進学しました。

今の子どもたちは、ネット上で、自由に性情報を得ることができます。その内容には、本当に驚くものばかりです。S子が探した中絶、緊急避妊ピルサイトなど、今の子どもたちは知識のないままにそういった情報に安易に飛びつき、解決しようとする姿が見られます。

たまたまS子は命にかかわる事態にはなりませんでした。大人の知らないところで、深刻な出来事が起こっていることは確かです。S子の場合はほんの氷山の一角の出来事です。

今まで実践してきたことに多少なりとも自負していた私ですが、相変わらず“性”のことについては、「寝た子を起こすな」という教師がいる学校で、改めて何ができるのかと考えてしまいました。

(中学校教員 脇野千恵)